

○生徒の実態や生徒との関わり

担当は2年生の道徳と女子の体育、3年生女子の保健の授業をうけもった。明るく素直な生徒が多く学校全体の雰囲気としても活発的に感じられた。しかし体育の授業では今の子どもたちの運動能力の低さや、二極化に驚いた。また、授業以外で生徒を観察していると、女子は仲が良く見えても少しのことですぐ揉めていたり、男子も先生を介さないと問題を解決できないことがあると知った。大人っぽい発言をしたかと思うとまだまだ子どもの一面も多く、ハッと気付かされる事ばかりだった。学級や学年によって雰囲気は様々であり、その雰囲気や生徒の反応によって授業中の声掛けや援助を変えていかないといけないと思った。部活動見学では、クラスでの様子とは違う生徒が多く、一生懸命で生き生きとしていた。学校では生徒たちと過ごす時間を多く取りたいと思っていたので、様々な教科や学年の授業見学をさせてもらい、空き時間には校内巡回をし、休み時間や放課後も生徒たちと関わりを多く持つよう心がけた。そして、生徒の名前をいち早く覚えることが大切であると実感した。

○授業実践、指導案作成の工夫や発見等、取り組み

1から10まで教えるのではなく、あえて失敗させることで「どうしたら上手くできるか」、「なぜこうしないといけないのか」などの理由を考えさせる場面を多くつくるようにした。また、生徒自身、自分の事を先生は見てくれていると実感できるように、「○○さん、今のパス良かったね」など名前を呼んで具体的な声掛けをするように心がけた。また、簡潔に指示を出すことを意識した。例えば、グループ学習する時に「振り返りをしましょう。」ではなく、「良かったところ、出来なかったところとその理由を話し合ってみよう。」など声をかけ、生徒が何を考えれば良いのか分かりやすいようにした。他にも、本の目次をイメージし、順序だてて話すようにした。言葉だけでは理解し難いことや、重要なポイントは目でも見えるように工夫した。そして、初めに授業や先生のルールを作ることで、指示しなくても生徒同士で声を掛けあったり、生徒が次何をすべきか予測して、行動することが出来ていた。「～しないで」ではなく、「～しましょう」などのポジティブな言い換えするようにした。1時間目は始まるのが少し遅くなったり、6時間目は早く切り上げて終礼に向かわないといけなかったりして、同じ授業でもタイムマネジメントが難しかった。学習指導案を作成するにあたっては、大まかな流れだけではなく、プリントを配布するタイミングや指示を出すタイミングについても一つ一つ考えた。評価することも考えて単元全体の授業計画を立てることや、評価基準や観点を明確にしておくことが大切であると感じた。また、タブレットや電子黒板等のICT機器も幅広く活用されており、メリットもデメリットもあるが、生徒の興味関心

をひきやすいと感じた。使い方を熟知し、これからも効果的に授業に取り入れていきたいと思う。

○教師の姿や職員室の様子

先生には、授業がない時は校内巡回をしたり、来ていないクラスの生徒へ電話をかけたり、生徒指導したり、しなければならないことがたくさんあることを知った。学校行事の運営や試験の作成等の様子もみれて勉強になった。職員室の雰囲気は良く、生徒の様子などを共有するなど先生方での連携もしっかりとられているように思った。授業規律を整えたり、学級経営をしていく中ではじめの線引きが非常に大切であると思った。先生は生徒に試されることがよくあるので、しっかりと自分の軸をもち、毅然とした態度でダメなことは叱れるようにしていこうと思う。どんなに怖い先生であっても、子ども愛を感じられた。生徒も自分のことを思って、叱ってくれていることを理解しているようで、素直に聞き入れる子が多かった。先生方は様々な家庭の事情を抱えている生徒がいることを理解し、一人ひとりの生徒に対して真剣に向き合っていた。生徒と一緒に喜んだり悲しむことで、生徒と先生の心の距離が近いように感じた。

教育実習の3週間は、大学では学べないようなことをたくさん知ることができ、とても貴重な経験となった。実際、教育実習生として教育現場に身を置き、生徒や学校の実態、先生の仕事について理解を深めることが出来た。一層、教職志向が高まったと同時に、自らの力不足を感じたので、さらに勉強し経験を積みたいと思う。